「西洋自然観との対峙における日本哲学の形成」研究会報告

相楽　勉

明治期において「哲学」を初めて本格的に受容した担い手たちにとって哲学が要求する新たな世界の見方と自らが負う伝統思想とのかかわりがいかに考えられたか、そして現実の社会にいかに生かそうとしたかを顧みることには大きな意味がある。昨年度はこの問題を、西洋思想の「翻訳」という場面に見出すことを試みた。特に、nature という語を「自然」という漢語に置き換えることから生じた問題を、国語学、文学、そして儒学の立場から考察した。本年度は、この「自然」問題をもう少し思想的本質に関して考察するべく二つの研究会を企画した。一つは、そもそも翻訳の前提である西洋的 nature 理解の歴史的背景に関する研究会であり、もう一つは西洋思想と対峙した儒学の歴史的展開にかんする研究会である。

第一回研究会（2017 年 7 月 26 日開催）では、鈴木道也研究員による講演「中世ヨーロッパの自然観」と質疑応答を行った。鈴木氏は明治期の日本人が直面した西洋近代の自然観自体が前近代からの歴史的形成過程の中で考えられ、その過程も様々に解釈されうること、また中世中期までのキリスト教神学において表立たない natura への関心が 12 世紀に高まった大きな理由がアリストテレス受容と共にイスラム圏から流入した自然科学の知識によることを指摘したうえで、それら多量の情報を整理する「百科全書の時代」（13 世紀）に注目する。講演後半においては、特にヴァンサン＝ド＝ボーヴェ『大いなる鑑』における自然への関心を、その第一書『自然の鑑』に見る。氏によれば、ボーヴェこそアリストテレス自然学を経験的知識体系として受容したアルベルトゥス＝マグヌスの真の後継者であり、自然界の事物に関する膨大な知識を、天地創造に関する聖書の記述（神の創造の順序）に従う形で整理しようとした。講演後、ボーヴェの百科全書的整理が博物学的発想を持たない理由や百科全書的時代以降専門分化に向かう経緯などについての質疑応答がなされた。

第二回研究会（2017 年 9 月 30 日）は「日本儒学と西学との出会い」というテーマを掲げ、江戸期から明治期に西洋思想にふれた日本の儒学者たちの思想と活動のうちに日本哲学の形成の一端を考察した。まず坂本頼之客員研究員は江戸中期の儒学者新井白石の西学批評の真意と歴史的意義を吟味された。西学が「形而下なるもののみ知りて、形而上なるものはいまだあづかり聞かず」という白石の評が「朱子学的普遍性」の観点に基づいていること、だが西学の自然探究が本来「形而上」問題と分離できるものではなかったことからすると白石の西学受容は限定的であったこと、ただ朱子学的普遍性からの評価という点にかんしては幕末の佐久間象山に影響を看得ることなどの指摘が示唆的であった。

播本崇史客員研究員は西周にとっての西学と儒学の関係に関して発表された。幕末にオランダに留学した西は、白石が述べた「形而上」問題に関しても「宋儒と理性主義〔＝西学の考え方〕」は似通っていると考えるが、それは西が「実証主義」として学んだ「天授の五官」による探究によって見出された。その手法こそが『百一新論』における「百教一致」として示された「哲学」の手法なのである。

さて、西が受容した実証主義的探究方法が明治期の社会や文化の形成に影響を与えたのは確かだ

が、そうした社会に生きる人々の持つべき道徳の普及に携わった儒学者や儒学運動に関して考察されたのが小路口研究員と吉田客員研究員である。

小路口聡研究員は、『日本道徳論』（1887）を著し道徳会活動を展開した西村茂樹の思想とその背景を解明された。西村は近代国家日本が必要とする道徳の基礎を「世教」（儒教）に求めるが、伝統的教義をそのまま受容するのではなく「西国の哲学」とも一致する「真理」に適うことをその条件とした。また発表後半では、この道徳の普及を目指す西村の道徳会運動が中国近世における陽明学派の講学活動を先例とするものであることが、多くの資料によって説明された。

吉田公平客員研究員は、明治から大正期にかけての陽明学普及運動を、特に吉本襄、東敬治、石崎東国の活動を中心に紹介された。吉本が創刊した雑誌『陽明学』（明治 29〜33 年）も、東の『王学雑誌』（明治 39〜41 年）も近代国家日本における人心の荒廃を憂えて、知行合一を旨とする陽明の教えの復興を目指したもので、東の設立した陽明學会には当時の学者のみならず経済人や政治家まで名を連ねた。明治末から雑誌による言論活動を展開した石崎は大正デモクラシーとのかかわりや陽明の良知心学を民衆の生活に生かそうとする点で新たな展開を導いたとのこと。西田幾多郎の『善の研究』が話題になった時期でもあり、同時代における西洋思想受容者たちとの関係もさらなる課題となるように思われた。

本年度二回の研究会を通じて、最後はどこかで一致するという普遍性へのまなざしに気づかされた。鈴木氏がボーヴェを通じて考察された百科全書的知恵は、いわば外なる自然に関する多量の知識がどこかで統一されうる確信に基づいているだろう。儒学者の求めてきたのも、一部の民族のみに共有されうる知恵ではなく、普遍的な人間の知恵という確信に基づいていた。ただ儒学の普遍性を吟味するために異文化を必要とするとも考えられる。西周の哲学受容はその一つの過程だと理解できるのかもしれない。社会改革のための儒学運動を展開した明治期の儒学者（儒者）たちも、西洋の思想文化との対峙の中で普遍的な人間性への希求を強めたとも考えられる。明治期に受容され展開された「哲学」とは、まさにそのような異なる文化圏の様々な思想の相互吟味の中で形成された新たな時代の思想文化と考えていいと思う。